

地球惑星科学委員会地球・人間圏分科会
社会水文学小委員会
(第25期・第5回)

議 事 要 旨

1. 日 時 令和4年7月8日(金) 13:00~15:00

2. 会 場 遠隔会議

3. 議 題

(1) 前回議事録の確認

- 前回議事録の確認を行った。

(2) 飯泉委員からの研究報告

- 飯泉委員から洪水分野における研究の進展について報告があった。
- 継続湛水から間断灌漑へ移行していることは学術研究の推進によって促進されている。このプロセスをシステムダイナミクスとして表現することも考えられる。
- フルダイクとセミダイクの機能の違いがあるが、セミダイクとしての明確な恩恵はなく、なぜセミダイクが残存しているかは不明である。
- 日本とアジアは社会規範や基本的なシステムは連続的であると考えている。稲作文化としての共通点が大きい。日本の事例をアジアへ適用することも考えられる。
- ヨーロッパとアジアでは個人とコミュニティの考え方が違う中で人と水の相互作用の構造が異なるのではないかと。資本主義と社会主義でも異なる可能性がある。
- 洪水の恵み(富栄養化)に関する研究はカンボジアを対象に風間先生(東北大)が実施している。
- 開発経済系の農業分野では、農家の行動を予測する研究が存在する。

(3) 千葉委員からの研究報告

- 千葉委員から地下水ガバナンスの研究の動向と国内事例について報告があった。
- 福井県大野市の事例において井戸枯れがきっかけとなって、少人数で調査活動が始まり、組織が成立していった。危機をきっかけに社会が変化する事例の一つであるが、他の地域から波及して変化する事例もある。地下水は将来的な影響がわかりにくいこともあり、未然にリスクを扱う事例は少ない。
- CLDにおけるそれぞれの要素間のフィードバックはどのように検討され、これがどのようにガバナンスに生かされるのか? バランシングフィードバックは自然からの圧をどのようにバランスするのかを定義している。ガバナンスに生かすことを明示的に掲げており、合意形成への活用を意識しているようである。
- 権力(power)の議論では、政治学/政治生態学では中心課題だが、地下水ガバナンスにおいてはほとんど議論されていない。
- 海外で地下水の公的管理が行われている事例はあるか? それに対して日本の制度・規制はどの程度なのか? 各国で地下水の管理の仕方が異なり、一概に日本の制度・規制の程度を比較的に測る

ことは困難である。インドは地下水に関する事例報告が多い。今後も国内外の事例について調査を継続する。

- インタラクティブガバナンスにおける、コミュニティにおける伝統的な水利組織と近代的なガバメントの関係性が日本的である一方で、人口減少などの社会変容に対してそれらがどのように変化するのが興味深い。日本においても、水管理の方法は地域において様々であり、伝統的な水利組織と近代的なガバメントがどのような関係性の中で役割を担っているのかを深掘りする必要がある。

(4) その他

- 今後の委員会の進め方について議論を行なった。

4. 配布資料

なし